

大平さんとグレイプフルーツ

猪 木 正 道

大平さんがすぐれた政治家であることを私に教えて下さったのは、ライシャワー元駐日大使である。たしか一九六八年の六月だったと思う。ボストン郊外のライシャワー邸へ、私は昼食に招かれた。大勢を集めるアメリカ式のパーティーでなく、客は私一人という日本式のもてなしだった。大きなロブスター料理をご馳走していただいたことが忘れられない。その席で、日米両国の政治家を比較することになった。米国では大統領選挙戦の中盤を迎えていたから民主・共和両党の候補者たちの名があがり、日本については、佐藤総理の後継者と目される人が登場した。ライシャワーさんは「日本国民は自分の国の政治家を過小評価しすぎる。ジョンソンやニクソンに比べて日本の総理候補者たちが劣るとは思えない」と強調された。この点では私も同感だったので、「では日本の政治家のうち誰が一番よいと思いますか」と私は単刀直入に聞いた。

直接法でライシャワーさんの答えを書くことは、大使に対して礼を失するおそれがあるので、私がえた感触という形で、大使の答えを記したい。大平さんがベストだとライシャワーさんは考えておられたことは間違いない。大使夫人は、ミセス大平もすばらしいと付け加えられたことを、私は覚えている。

その後、私は大平正芳という政治家に注目していたが、直接ご縁ができたのは一九七九年三月に、「総合安全保障」に関する私的諮問グループの座長を引き受けてからである。報告をとりまとめたのは京都大学の高坂正堯教授だが、高坂さんと私との二人から事前に大平総理へ話をするようになった。このため一九七九年の年末と一

九八〇年四月二日の二回、私たちは首相官邸に招かれた。いずれも朝食会である。毎日ベーコンと卵とトーストと蜂蜜とそしてコーヒーの朝食をとっている私には、官邸の和風朝食は苦手だったがやむをえない。第一回目は高坂教授が世界の軍事情勢を説明され、大平さんは熱心に聞いておられた。この時には私は余り強い印象を受けなかった。第二回目は、大平総理の米國訪問が一月あとに予定されていただけに、私たちも全力をつくしたつもりである。大平さんの反応も、第一回目には比べると、比較にならないほど手応えがあったように思う。

食事の最後にグレープフルーツが出た。洋食ならまっさきに出るハーフ・グレープフルーツである。大平さんはスプーンでこれをめしあがった後、突如グレープフルーツの皮を右手でつかまれた。向いあつて坐っていた私が、びっくりしているうちに、大平さんはグレープフルーツの残骸を力強くしばって受け皿にジュースをたらし、一気にそれを飲みほされた。この光景は今でも眼前に浮かぶほど強烈な印象を私に与えた。

家庭でグレープフルーツを食べる時、私もスプーンでいただいた後、残骸をグラスにしばって飲む。天然のグレープフルーツ・ジュースは実につまいものである。しかし客の前ではそうするだけの勇気を私は持たない。特にグレープフルーツをおいた皿には水がたまっていることが多く、私は別のグラスを用いてグレープフルーツのジュースを注ぐことにしている。大平さんが私たちの前で、きわめて無造作に、グレープフルーツをわしづかみにして、力強くしばられた時、私は本当に深い印象を受けた。「この方は庶民の宰相だ」と私は痛切に感じた。大平さんと私との間の距離はぐっと縮まり、無限の親しみを私は大平さんに対して抱くようになった。

米國を訪問された大平さんが、カーター大統領をはじめアメリカ政府の人々とはもとより、新聞記者にもすばらしい好印象を与えて、日米関係をきわめて緊密なものにされたのは、やはり「庶民の宰相」としてのかざらない誠実さのせいだったと思う。

(平和・安全保障研究所理事長)